

デーリー東北 2020年(令和2年)12月10日(木曜日) (9)

八工大の星野教授「雪腐病菌」研究し30年

あるマイナーな菌類に、異常な愛情を注ぐ教授が八戸工業大にいる。カビやキノコなどの菌類を専門とする工学部生命環境科学科の星野保教授は、雪の下で活動する「雪腐病菌(ゆきぐされびょうきん)」を約30年にわたって研究。海外調査の体験をつづった『菌世界紀行 誰も知らないきのこを追って』(岩波書店、2015年)は、優れた紀行に送られる日本旅行作家協会の第1回斎藤茂太賞を受賞した。研究の傍ら、一般書を通じて菌類の魅力を発信し続ける星野教授は「どんな菌も生き方は奥深く、一冊の本になる。菌類に興味を持つきっかけになれば」と話す。(玉川那津美)

「菌の生き方は奥深い」



ユーモアある作風で菌の魅力を発信する星野保教授＝八戸工業大

略歴 ほしの・たもつ 東京都生まれ。名古屋大学大学院農学研究科博士課程退学。博士(農学)。産業技術総合研究所を経て、2019年4月から現職。56歳。

雪腐病菌は積雪下や菌の魅力を「研究して人の相棒と泊まった民寒冷地で繁殖し、植物いる人が少ないから」家の人々がマフィアだや小麦を枯らすのが特と笑うが、カビやキノった話や、寝台列車で微で、農家やゴルフ場コなどの菌類は、遺伝同席した乗客からウオ経営者らにとっては大子の構造が私たち動物ッカでの歓迎を受け、敵。星野教授は勤務しと一番近く、身近に感翌朝は通路で起きた話っていた北海道工業技術じるのも理由の一つなど、ユーモアあふれる研究所(現産業技術総合研究所北海道センタつづいた。る作風で「菌道中」を研究のためシベリアや極地などを駆け回った。まさかの斎藤茂太賞生物を活用した産業利が、講演を聞いた編まで受けたが、読者か用の技術開発を命じら集者に声を掛けられてらは「酔っぱらってれたのをきっかけに、執筆したが、『菌世ばかりで学術的な記述この菌と出合った。』だ。旅費を少ない』『菌の部分星野教授は、雪腐病節約するため、ロシアを飛ばしても面白い』

魅力発信、紀行で斎藤茂太賞も



星野保教授の著書、菌類3部作

など、お褒めの言葉を頂いた」と言う。年(では、雪腐病菌のみならず、菌類全般の生活環境や多様な生き方について紹介している。2)『菌は語る』 すっかり菌の魅力の生きさまと知性』(春秋社、19年)では、1伝道師となった星野教授。本気が冗談か、「今作目の汚名?を晴らすと、ユーモアを残しつつ、雪腐病菌を詳しくガマンホタケを主人公く解説。すると今度は、にしたライトノベルを「脚注が長く、飲んだ書いてみたい」と語る。もちろん本業でも「雪腐病菌を用いた青森県内の産業振興や、県内の菌についても研究を進めたい」と意欲を燃やしている。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。